

多様な災害に対してレジリエントな都市・建築を目指して

[資料あり]

9月9日(木) 13:30~17:00 第6室

司会 高口洋人(早稲田大学)
副司会 朝川 剛(東京電機大学)
記録 杉村義文(NTT ファシリティーズ)

第1部：2021年度日本建築学会技術部門設計競技表彰式

1. 審査経過報告ならびに総評 牧 紀男(審査委員長/京都大学)
2. 賞贈呈・祝辞 田辺新一(本会会長/早稲田大学)
3. 受賞作品の紹介 牧 紀男(前掲)

第2部：パネルディスカッション

1. 主旨説明 牧 紀男(前掲)
2. 主題解説
 - ① 各種建築・都市レジリエンス指標
西本篤史(日建設計)
 - ② レジリエンス指標活用・基準化検討
堀江 啓(MS&AD インターリスク総研)
 - ③ 変容する自然災害への対応
西嶋一欽(京都大学)
 - ④ レジリエント建築カタログ
槻橋 修(神戸大学)
3. 討論 増田幸宏(芝浦工業大学)
4. まとめ 竹脇 出(京都大学)

防災対策でのキーワードとなるレジリエンスとは「厳しい環境変化を乗り越えるしなやかな力」であり、様々な大規模災害に見舞われる我が国の地域社会において、災害から命を守ると同時に被災から速やかに回復することのできる建築や都市が切実に求められている。

日本建築学会では、これまで「建物のレジリエンスとBCPレベル指標検討特別調査委員会」を設置し、建物のレジリエンス性能の評価の基本的な考え方ならびに具体的なBCPレベル指標の設定手法についての検討を行った。その成果は、2019年度大会PD「事業継続計画策定のための地震災害等に対する建物の機能維持・回復性能評価指標の提案に向けて」と報告書により公表されている。この委員会を継承する「レジリエンス建築タスクフォース」では、2020年11月には「レジリエント建築シンポジウム」を開催し、2021年度技術部門設計競技「新時代のレジリエント建築・都市」を主催した。

本タスクフォースでは、多様なレジリエント建築の姿を示しつつ、レジリエント建築の定義・評価・考え方ならびに社会にレジリエント建築を普及させる方法の検討を行うことを目的に、活動を行っている。タスクフォースには、①各種建築・都市レジリエンス指標、②レジリエンス指標活用・基準化検討、③変容する自然災害への対応、④レジリエント建築カタログの4つのワーキンググループを設置し、レジリエント建築について多様な側面からの検討と資料のとりまとめを行った。その詳細内容を解説し、幅広い分野の方々との議論を行う。

共に働き、共に暮らし、共に育てる ——建築に携わる人のシン・ワークライフバランス

[資料なし]

9月10日(金) 13:30~16:00 第4室

司会 松村正人(大成建設)
副司会 眞方山美穂(国土技術政策総合研究所)
記録 八藤後猛(日本大学)

1. 主旨説明 眞方山美穂(前掲)
2. 基調講演
建築界のワークライフバランスの「今」
大西友美子(ワーク・ライフバランスコンサルタント)
3. 主題解説
共に働き、暮らし、育てる時代の生き方・パートナーシップのリアル
吉川理恵(竹中工務店)・池添 大(徳島県)
榎田洋子(桃李舎)・山崎 晋(日本大学)
4. 討論 男性も女性も学生も社会人も、参加者と共に考える
建築に携わる人のシン・ワークライフバランス
ファシリテーター：井上竜太(竹中工務店)
5. まとめ 寺田 宏(東畑建築事務所)

日本建築学会の男女共同参画推進活動は、2008年の行動計画からスタートして14年目を迎える。その間に実施したアンケート調査や、各支部における「建築学会女性会員の会」の取り組みにおいて、特に男性の意識改革を求める提言が繰り返されてきたが、果たして男性の意識は全く変わってこなかったのだろうか？

イクメンという言葉が生まれてから10年以上が経ち、「男の育児」は広く世に浸透しつつある。男性新入社員の実に約8割が育休取得を希望しているという調査結果が出るなど、若手を中心に男性の意識は確かに変化している。その一方、男性の育休取得率は7.48%(2019年度)に留まっており、男性本人の意識だけでは説明できない壁が存在していると言わざるを得ない状況である。今回、改めて「ワークライフバランス」をテーマに掲げ、この壁について考えることとした。

基調講演では、数多くの企業に対してワークライフバランスのコンサルタントを行っている大西友美子氏から、他業界と比較して特に建築界に不足している部分や、建築界ならではの魅力、建築関連企業の先進事例を紹介していただく。続いて、共に働き、暮らし、育てる時代の生き方やパートナーシップについて、男女それぞれの立場や、従業員の働き方を傍らで眺めてきた経営者の立場から、リアルな話題を提供していただく。その後、建築に携わる人のシン・ワークライフバランスについて、参加者を交えディスカッションを行う予定である。

コロナ禍においてテレワークの活用など新しい働き方が広がった一方で、家庭内における女性の負担が増したとの指摘も多い。コロナ禍における生活の変化についても、それぞれの立場から話題を紹介していただく予定である。男女問わず多くの方に参加いただき、建築界の今や将来を考えるきっかけとしていただければ幸いである。